

「チェルノブイリ28年目の子どもたち」 3月29日芦屋 白石草さん講演会に参加して



OurPlanet-TVのホームページは見ていたが、代表の白石さんのお話を聞くのは始めてだった。白石草（はじめ）さんはウクライナを昨年までに2度訪問し、映像と岩波ブックレット「チェルノブイリ28年目の子どもたち」にまとめられた。今回の講演会は、フクシマの子どもたちを守るために、ウクライナに学ぶ目的で開かれた。白石さんのお話は具体的でわかりやすく、示唆に富んでいた。

〈チェルノブイリ原発からコロステンは140km、 高浜原発から京都は60km、大阪は90km〉

「ウクライナから学ぶ」という話の初めは、コロステン第12学校（6歳～17歳まで公立の一貫校）の様子だった。コロステン市はチェルノブイリ原発から140km、距離は高浜原発から京都・大阪・神戸の方がずっと近いことをまず確認した。

〈ウクライナの教育と医療の充実〉

コロステン市の25年間の積算被ばく線量は平均1.5～2.5mSv。チェルノブイリ原発事故から30年近く経た低線量被ばく地域の学校でも授業時間短縮や試験の免除や優遇がされ、体育は全員で同じようにできず、健康レベルによって基準通りの授業から体育免除まで4グループに分けて行わざるをえないという実態がある。給食は未だに放射性物質を計測しており、保護者も給食への心が高いが、健康防疫省の抜き打ち検査の方が保護者の目より厳しいというのには驚いた。学校には医師、看護師、歯科医、（幼稚園にはマッサージ師も）いて、子どもの健康に気を配っている。

事故後、甲状腺がんや白血病が増えたが、28年経った現在、小児甲状腺がんはなくなったようだ。しかし、100%健康な子はおらず、先天性心臓病や慢性的な病気が増え、複数の疾患を持つ子どもも多い。保健室は診察室、治療の部屋、歯科の部屋、アロマの部屋の4部屋あり、小児科医が常駐し治療も行っている。

子どもの検診は、検診の手引き、被ばくリスク段階、健康診断指針などが整備され、きめ細やかな診断がなされている。徹底した健康管理は、人、子どもを大切にする社会主義的思想によるのだろうか。

〈隠されている「チェルノブイリの健康影響25年 ウクライナ報告書」〉

2011年4月に「チェルノブイリ25年ウクライナ国家報告書」が出された。フクシマ事故のあとだったので、私たちもこれを見て、直接被ばくしていない2世代目の子どもたちの健康にも影響が出ていることに愕然とした記憶がある。しかし、白石さんはウクライナ放射線医学研究センターと長崎大学との協力で更に詳細な健康影響の研究をまとめた報告書が2011年8月に公表され、日本にも300冊送っていた事を明らかにした。その報告書にはあの山下俊一が「はじめに」で、「この研究は日本にも寄与する」と書いているようだ。白石さんは報告書を求めて国

会図書館を始め、放影研や長崎大学などに尋ねたが、見つからなかったという。ウクライナの人々が日本の子どもたちを心配し、健康被害を食い止めるために研究報告を送ってくれたにもかかわらず、それを活かそうとしないどころか隠して事故の責任逃れをし、原発を推進する日本政府にさらに失望する。

〈チェルノブイリ法に守られる被ばく者〉

1991年に成立したチェルノブイリ法に基づいて現在でも240万人の被ばく認定者に補償や支援が行われている。元々社会主義国だったので、教育や医療が無償な上に被ばく者には年金の早期受け取り、大学への優先入学、家賃や交通機関の無料券、健診、被汚染食料の配給など多くの特典がある。最も大きいのが「保養」プロジェクトで、旧ソ連での保養文化（労働組合の夏期休暇、子どものピオネール活動など）がベースにあり、病気がある場合は社会保養庁の負担で大人も子どもも年21日間の保養が保障されている。そしてこの保養は被ばく者だけでなく、親のない子、貧困家庭の子、兄弟の多い子、障がいのある子、戦争地域の子など厳しい環境にある子が全て対象になっている。もちろん一部個人負担はあるが元気な子どもも保養の機会を保障されている。保養所のガイドラインは保健省が定め、教育や医療も含むたくさんのスタッフを揃えている。

治療内容に種々のセラピーや、温熱療法、鍼灸等あるので意外だったが放射線による健康被害は免疫力の低下、疲れやすいなど老化に似ていて、老化防止の療法が効くそうである。

教育科学省は汚染地に住んでいる子どもを守るために保養は重要であり、国家の義務と考えているようだ。

チェルノブイリ法ができた当時はソ連邦に賠償を要求していたが、ソ連崩壊後、ウクライナ政府の責任で行わなければならなくなった。金銭的な賠償は制度通りに支払えたことがなくわずかだが、社会保障の充実によって健康被害を食い止める努力をしている。

〈福島第一原発事故の被災者は、自分の健康被害や健診結果をはっきりと話せるようになるのだろうか〉

白石さんは、教室で鼻血を出した男子生徒がだまって席をはずし、先生も周りの生徒も何事もなかったかのようにふるまい、しばらくしてその生徒は静かに元の席に戻ったということがあったというエピソードを紹介した。今の福島では体調不良はあってはいけないこと、事故前とは違う症状が出ても隠さなければいけないことようになっていて、汚染地域に戻ることが復興であり、健康不安は復興の妨げだと言われ、声に出すこともできないようだ。チェルノブイリの子もたちはカメラの前で自分の症状やどんな検査を受けたのかはっきり語っていた。

子どもたちが自分の健康状態を知り、受け入れながら将来を夢見る、不都合なことがあっても決して不幸ではない、チェルノブイリの子もたちの明るい笑顔を見てそう思った。日本の子どもたちもあのように自分の健康を語れるようになるのだろうか。

〈健康被害を認めず、子どもを利用し帰還強化政策。西日本から声を上げるしかない〉

汚染は、宮城・福島から東京を含む関東一円に広がっている。福島県外で甲状腺異常が自覚症状で分かった子どもも出ているようだ。ところが、福島県産の米を使った学校給食、子どもの帰還を促進する目的で広野町に「ふたば未来学園」を開校、Jヴィレッジへの五輪誘致等々の「復興政策」の中で、人数の減った医者も福島県立医大に牛耳られ何も言えなくされている。国会議

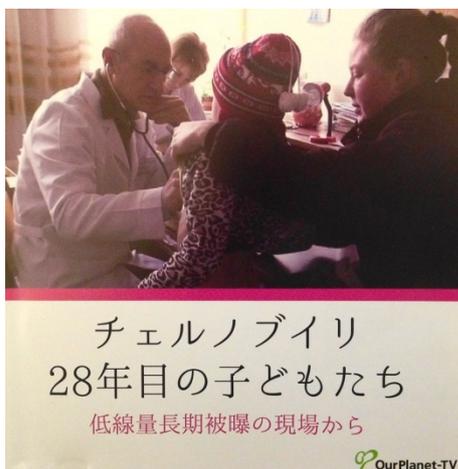
員はもっと頼りにならず、「原発事故子ども・被災者支援法」は棚ざらしのまま対策はほとんどない。原発推進のためには避難はさせず、被災者をできるだけゼロにしていきたいのが日本の政府だと言われていた。

そして、日本の最大の問題は「どうせ被ばく影響の立証は誰にもできないだろう」と被ばくを認めようとしないうことだと指摘された。被ばくを認めれば、①東電と経産省②スピーディを隠した国と福島県③ヨウ素剤を飲ませなかった専門家④事故の影響を過小評価した専門家の責任が問われる。そして、小児甲状腺がんが見つまっている60km、90km、100km圏でのヨウ素剤が必要ということになる。原発再稼働のための避難計画が問われているが、政府は小児甲状腺がんの多発を問題にしないよう必死になっていると明解な分析をされた。

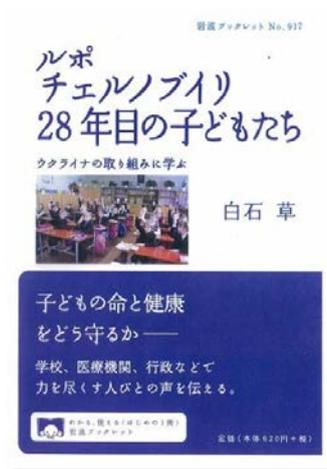
放射能汚染地域で話題にもできない現状を変えていくために、汚染のない西日本から原発再稼働反対と原発事故の責任を問う声を上げていくことを強く求められた。福島だけを強調せず、東電の原発事故という言い方はできないものかと投げかけておられた。

講演の後、たくさんの質問が出たが、どのような内容にも的確に答えられ、充実した講演会でした。講演会は、美浜の会、原発なしで暮らしたい丹波の会、グリーン・アクション、おおい原発止めよう裁判の会事務局の主催で行われました。

私は大阪で、保養の家の活動を行い、福島や関東から子どもたちを受け入れ、少しでも健康影響を緩和したいと思いつけています。白石さんのお話を聞いて、改めて、再稼働を許さない活動と、福島の子どものたちを守る活動を連携させながらやっていきたいと感じました。各地で多くの人に、白石さんのお話や、本・DVDが広がってほしい。 (静)



DVD 上映権付きで2,000円
注文は OurPlanet-TV のホームページから
<http://ourplanet-tv.org/>



「ルポ チェルノブイリ 28年目の子どもたち—ウクライナの取り組みに学ぶ」
岩波ブックレット 著：白石 草 本体：620円
美浜の会でも取り扱っています。注文は
mihama@jca.apc.org